様式第８号

事　業　報　告　書

団　　体　　名	高校生が選ぶ掛川文学賞実行委員会 （静岡県立掛川工業高等学校）
事　　業　　名	「高校生が選ぶ掛川文学賞」事業
事 業 内 容 （実施内容とスケジュールを具体的に記載）	①７月５日(水)16:00～16:50 第１回実行委員会開催（掛川工業高校） ②７月24日(月)13:00～14:30 市民選書会議（掛川市役所） ③11月11日(金)16:30～17:30 第２回実行委員会開催（掛川市立中央図書館） ④11月11日(金)16:30～19:00 高校生選考会議（掛川市立中央図書館） ⑤１月20日(土)14:00～16:00 高校生読書サミットin掛川（掛川市立中央図書館） 具体的内容については別紙実施要項参照
事 業 成 果 （事業計画に記載した目的、成果目標及び波及効果に対する達成度等）	子ども読書啓発活動の中で事業実施が難しかったヤングアダルト世代に対象とした事業を、多くの立場の方々を巻き込みながら実施することができた。 この事業を通じて、掛川市内の県立高校と市立図書館の連携が深まり、掛川市の読書推進に関わる事業が子どもからシニア世代まで切れ目なく実施できるようになった。 また、高校生にとっては、選考会議での対話による相互理解や読書イベントの企画運営を通じて主体性を学ぶ機会となった。
事　業　期　間	令和５年　６月２７日　～　令和６年　３月１３日
今後の事業展望 （反省点・改善点、短期及び中長期のビジョン、継続性・財源確保等）	夏季期間中を含めた時期に高校生に読書をしてもらいたいため、選書（市民選書会議）までの期間が短く、日程調整が難しかった。契約前に内定の早く通知をいただければ、事前調整は可能である。 選考会議では、対話を重視したため時間がかかり、施設に迷惑をかけてしまった。夜間開放をしている水曜日、木曜日に高校生選考会議を開催したい。また、中学生に高校生選考会議を傍聴させたい。 啓発活動は継続して実施してこそ意味があるので、次年度以降は公募事業ではなく、経常事業として定着するように働きかけたい。

令和５年度高校生が選ぶ掛川文学賞

「高校生読書サミット in 掛川」のふりかえり

令和６年２月

高校生が選ぶ掛川文学賞実行委員会

Ｑ１「オープニングセレモニー（授賞式・交流会）について、お気づきの点や御感想等がありましたら記入ください。（受賞作家さんや高校生へのメッセージ）」

・高校生の方達の一生懸命な姿に感心しました。遠未先生もとても親しみやすい方で今回参加する事が出来て良い経験となりました。
・生徒さんが一生懸命取り組まれてきた様子が伺えて素晴らしいと思いました。一冊の本からそれぞれの想い、感じたことを聞かせていただきました。遠未さんの想いまで聞かせていただけて、ステキな時間でした。
・高校生の皆さんが自分の言葉で一生懸命に話されてるお姿に感動しました。
・作家さんのまとめるチカラはさすが元応援団のまとめ役。作家になっても積み重ねたものは行動に出るものだと勉強になりました。
・交流会の椅子は一段高くなってる壇上に置いたら、よく見えた気がしました。
・遠未さんの受賞メッセージが印象に残りました。交流会での生徒の質問にたいして、遠未さんが丁寧に答えていたのが印象的でした。"
・高校生からの質問に応える遠未先生の笑顔に、会場がより和やかになっていくのを感じました。
・生徒が主体となって活動できたと思います。
・少し時間が足りないかとも思いましたが、後のことを考えると妥当かな？
・生徒もしっかり責務を果たしてくれました。少し、たどたどしい場面もありましたのでそこだけ練習しておいてほしかったと思いました。
・受賞作家さんがどういう経緯で受賞作品を書いたのか、どういう思いが込められているのかを、今回の受賞式で知ることができて感動した。
・交流会は作家さんからも高校生からも質疑応答ができる形で本当に素晴らしかったと思う。また、自分の意見を言える空間というものができていて話しやすかった。
・たくさんの知らない大人の前に出て話すのは緊張したと思います。交流会では遠未さんと直接お話が出来て良かったですね！高校生の皆さんが、本が好きなことが良く伝わってきました。今回、掛川文学賞を受賞された遠未先生から直接お話をお聞きできて本当に良かったです。高校生との交流での対話や、以前されていた応援団での経験から、本当に優しい方なんだと思いました。遠未先生も高校生読者の声を直接聞く機会に得て、きっと嬉しかったと思うので、とても良い交流会だったと思います。
・高校生たちは緊張しながらも頑張ってやっていて良かったです。
・詰まるところもあったが、高校生らしい進行でよかった。遠未様の笑顔に助けられ雰囲気の良いセレモニーだったと感じました
・一人ひとりに寄り添いしっかりとした流れがありよかった。
・本当に興味ぶかかったです。
・高校生が主体でやっている感じがあり、良かった。

・慣れないながらも頑張って準備し、一生懸命話をしている様子がとてもよかったです。ひとりひとりちゃんと話せてすごいなあと思って見ていました。
・高校生たちが一生懸命運営している姿にとても好感が持てました。
・遠未さんがこの賞を受賞して嬉しかった理由がとてもステキでした。

Ｑ２シンポジウム『世代を繋ぐツールとしての本』について、お考えいただいたことや御感想等がありましたら記入ください。

・昨年からサミットに参加させて頂いています。同じ本を読み感想を言い合う、どんな感想を言っても大丈夫と言う空間、結構楽しいです。本って凄いなと再確認しました。
・高校生に戻りたいと思いました。が、88 歳の男性の方がおっしゃったように年齢は関係ない。たくさんの気づきをいただき、また明日から楽しんで 1 日 1 日生活していきたいと改めて思えた時間となりました。
・世代が代わっても、本の面白さや思うところなど共通する部分もあるのだなと思いました。
・サミットの参加者は老若男女で素晴らしい
・日ごろから高校生世代、若者世代（Z 世代）、中年世代、高齢者世代と、繋げるのが本だと考えています。
・パネリストの様々な意見を聞くことができたと思います。興味深い話もあり、もう少し時間が取れればよいとも感じました。
・やはり、本が世代を繋ぐというコンセプトは正解でしたね。高校生が選ぶという点で、読書活動が市民に広がっていくことが期待できます。
・作者さんの考えが分かりやすかった（伝え方が大変上手だった）
・作家さんが高校生にどんな風に読んで欲しくて、どんな感想を聞くことができるのかを楽しみにしていてくださって、選ばれた時にどれだけ嬉しいことだったかを聞いて、真剣に話し合い、意見を出し選んで良かったなと思いました。
・世代を繋ぐツール、という今回の小説になぞらえた題材はとても良かった。参加していない自分でも十分に楽しめるものだった。
・この世代を繋ぐツールという視点が今後、作家にとって一番必要な視点になってくると私は思った。
・本との出会いのきっかけは、本当に人それぞれだと思います。この掛川文学賞がその一つのきっかけだと思います。シンポジウムで、皆さんと本の関わりを聞けて楽しかったです。受賞作家の遠見さんが積極的にお話ししてくれる方で良かったです。進行役の新聞社の方も上手く進めてくれていたと感じました。
・素敵なテーマであり、様々な人に届けば良いなと思った。
・本というものの力を感じています。本を通じて対等のコミュニケーションができるという

遠未先生の話が面白かったです。本が接着剤やクッションになる。

・１つのテキストを読むことで、人それぞれの思いに触れることができてよかった。本の前ではみな対等だし、自分の視点でない視点を知ることができる。そういう点が本の優れたところだと思います。

・はじめから、ずっと「この本の主人公が 70 歳だから」がテーマになっていて（必要以上に）私としては違和感がありました。もっとこの本の深いところを語ってほしいとずっと思っていたので、ほんわかブッククラブの男性の意見はとても気持ちが良かったです。ありがとうございました。シンポジウムのテーマが最初からそうだったかもしれないのですが、(「世代をつなぐ」とあったので）せっかくなので、もっと深いお話が聞きたかったです。でもそんな中で遠未さんがしっかりまとめながら進めてくださったので良かったです。たくさんの学びがありました。さすがでした。

・作者の遠未さんの話し方、言葉をききながら「おかげで死ぬのが、楽しみになった」の一場面を見ているような気がしました。ふだんから周りのみんなを応援し元気づける方なのですね。とても楽しい時間でした。ありがとうございました。

Ｑ３本日のイベント「高校生読書サミット in 掛川」全体を通じて、お気づきの点や御感想がありましたら記入ください。

・楽しく参加させてもらいました。

・関係者の皆様は大変だったと思います。お疲れ様でした。

・ステキな企画をされていて、こんな活動が全国に広がるといいと思いました。ありがとうございました。

・高校生選考委員感想集がとても分かりやすく、他の作品も読んでみたくなりました

・掛川のお茶のパンフレットでお茶の魅力を感じ、飲みたくなりました。お茶のチカラ、おそるべし！

・イベントが高校生を主体として行っていたのがいいことだと思います。

・ネット社会に於いて顔を合わせながら自分の意見や感想を話し共有出来る貴重な場所だと感じました。

・著者遠未氏本人が参加していただいたため、非常に盛り上がったと思います。

・素晴らしい企画運営で、杉山先生の力に負うところが多く、暫く継続して展開することを強く望みます。

・作者と高校生の交流が、作者にとっては新たな構想を、高校生にとっては目標というか視野が広がる大変良い機会になっていると思う。

・私は今までこういういろいろな立場の人達で話し合い、イベントを行うことに参加したことがなく、初めて学校を通して参加させてもらってとても楽しかったですし、いろいろな視点で見ることが大事だなと気づきました。

・実際に作者さんをご招待するというのは私達高校生にとって、とても良い経験になった。作家さんのご意見や小説におけるお話は、私達の大きな成長に繋がった。また、新たな文学に対する視点を得ることができたように思う。
・とても内容の濃いイベントだったと思います。参加出来て本当に良かったです。
・高校生たちが学校の枠を越えて色々な体験ができて良かった。
・多くの方が参加されよかった。保護者やブッククラブの方以外にも参加される方がでてくるとよいと感じます。告知の方法など、なかなか大変になってしまうかとも考えます。
・流れ、進行が良かった。
・また、開催されるとのこと。ぜひ聞きたいです。
・遠未先生のトーク力と高校生たちの真面目さが融合して素晴らしいと思った。おもしろかった。
・すばらしい取り組みですね。ずっと続けてください。受賞した作家先生の公演会（スピーチ）でまとめて時間をとってもいいのではないかと思いました。例えば30分ぐらいでも。
・作家本人と会えるサミットというものが珍しいと思います。昨年に引き続き大変ありがたいです。
・全体を通じて、高校生の声がもう少し聴きやすければよかった。

Ｑ４「高校生が選ぶ掛川文学賞」の取り組みについての御意見や御感想、今後に期待することがありましたら記入ください。

・今後も続けていってほしいと思います。
・若い子達が本気で選んだ本を読んでみたいです。
・ずっと続けていただきたいですし、たくさんの生徒さんにもこんなステキな経験をしてもらえるといいのではと思いました。
・本の面白さを語ると、それ、読んでみたいな、と思うので学校内でもどんどん発信していったらいいと思いました。
・素晴らしい企画をありがとうございます。
・これからの発展をお祈りします。
・益々のご発展をお祈りしています。
・多くのことを事務局に任せすぎてしまっているように思います。すみません。より多くの高校生が参加できるよう、経済面での手厚い支援が必要だと思う。男子がもう少し参加してくれると良い。
・もっと沢山の方にこの取り組みがあることを知って欲しいなと思いました。
・専門の方や作家さんでもないただの高校生が決めるというところが素敵だと私は思った。また、高校生が読んで決める、本を読む機会ができるだけに留まらず、決定の際の責任感

や本への関心も養うことができる。今後の文学の未来にとても良いと感じた。

・掛川市の中学校の部活動が令和９年で地域クラブに移行します。本が好きな子に地域クラブとして何か出来ないかなと思うことがあります。事務局、関係者の皆様、とても大変だと思いますが、生涯学習宣言の先駆け掛川市の『高校生が選ぶ掛川文学賞』は、とても意義があることなので是非継続していただきたいです。

・事務局の皆様、お疲れ様でした。仕事を継承できる人はなかなかいない事が今後の課題かと思います。個人の力量に頼ることなく、イベントを行える組織があるといいのですが。

・事務局の御尽力、各校先生方の御協力で、第２回高校生が選ぶ掛川文学賞も無事行うことが出来ました。ありがとうございました。来年度選考会の曜日、会場等中央図書館に迷惑をかけない形で検討できればと思います。現在掛川市の高校生チャレンジ事業を使っていますが、静岡県のドリーム・プロジェクトを活用することも考えられるかと思います。（ただし、より生徒主導でなければならないという点がハードルが高くなってしまい現状では厳しいと思います。）

・これからも継続し、より本についての興味を持ってほしい。

※ご参加されたみなさま、主催した高校生、関係者からの感想や気づきをまとめてみました。それぞれ違った視点から、高校生が選ぶ掛川文学賞「高校生読書サミット in 掛川」をふりかえっていただけました。共有させていただくとともに、次年度以降に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

（文意に添いながらも修正させていただいた感想や気づきもあります。ご容赦ください。）

令和６年２月１６日

編集　高校生が選ぶ掛川文学賞実行委員会事務局

高校生が選ぶ
掛川文学賞
since 2022

令和５年度

高校生選考委員感想集

令和６年１月

高校生が選ぶ掛川文学賞実行委員会

第２回掛川文学賞受賞作品

『おかげで、死ぬのが楽しみになった』（サンマーク出版）

第一話　シャイニングスター
　引間広志の世間は狭い
第二話　シャイニングメモリーズ
　宮瀬実の恋は実らなかった
第三話　シャイニングワード
　板垣勇美の震える一歩
第四話　シャイニングスマイル
　巣立希は絶望を描く
第零話　シャイニングフューチャー
　巣立進の時間は戻る

　青春くらい熱くて尊い！　泣ける「老春」小説刊行！心がぽかぽかあったまる、ほっこりコメディ。
　定年退職後、無所属、無希望。かつて応援団員だった３人が、友人の通夜で集まった。そこに、「応援団を再結成してくれ」と遺書が届くが、誰を応援してほしいのかが分からない……！？

選んだ理由を高校生選考委員に聞いてみました

・70 歳のおじいちゃん達が、一生懸命何かを成し遂げようとしている姿がかっこいいと感じた。
・救われた言葉が多く、今の学生に刺さるところが多かった。
・もう世間では高齢者とも言われてしまう人たちが、青春を再び過ごしていく。過去の挫折を振り切って自分が「わくわく」する道へと進んでいく姿にとても心動かされた。
・死ぬということに対する自分のイメージが大きく変わる１冊だった。
・今の自分たちの立場で書かれた作品ではなく、学生時代を振り返った話で情熱や友情を感じた。

遠未真幸（とおみ・まさき）さんのプロフィール

1982 年、埼玉県生まれ。失われた世代であり、はざま世代であり、プレッシャー世代である。

ミュージシャン、プロの応援団員、舞台やイベントの構成作家を経て、様々な創作に携わる中で、物語の持つ力に惹かれていく。『小説新潮』に寄稿するなど経験を積み、本作を６年半かけて書き上げ、小説家デビー。「ＡかＢではなく、ＡもあればＢもある」がモットーのバランス派。いつもの道を散歩するのが好きで、ダジャレと韻をこよなく愛す。

遠未真幸さんからのメッセージ！

受賞の喜び

70 歳のおじいちゃん達が主人公の小説が、高校生の皆さんの心に響いた――。

作者の私は驚き、同時に「物語は世代を超えて届く」という確かな希望を感じました。

さらに選考会議を１時間も延長し、話し合いを重ねて決めてくださったと聞き、自分の作品が選ばれたこと以上に、本が好きで読書の魅力を伝えようと奮闘する高校生達に出会えたこと、彼ら彼女らに選考を託し、信じ、支え続ける掛川の皆さんとご縁をいただけたことが本当に嬉しいです。

小説を書き、初めていただいた文学賞が「高校生が選ぶ掛川文学賞」だということを誇らしく思います。

あらためて、本を愛する同志である選考委員の皆さま、本を通じて掛川の街に寄り添い応援し続けている皆さまに、心からの感謝を捧げます。

遠未　真幸

選考委員の感想

〇受賞作品

遠未真幸『おかけで、死ぬのが楽しみになった』

（サンマーク出版、2023 年５月）

・この本を読んで私は、この人たちのように年を取りたいと思いました。「もう年を取り、体力もなく、声も以前のようには出せなくても、誰かを応援したい」という気持ちのままつっぱしる姿がとても印象的でした。見返りがあるかは別として、それをやってみたいという理由に正直になれば、自然と結末はついてくるのだと思います。

・１つ１つの物語がそれぞれ違った気づきを与えてくれるそんな読めば読むほど心が温かくなる小説だった。また、それぞれを主人公が順番に書かれていて、少しずつ１人１人の過去や不安が明確になっていくのも楽しかった。登場人物の性格や人柄が最後にはハッキリと見えるようになる。彼らの会話が時には楽しく、時には深刻に、時には熱くなるのが、その人柄の上でも高齢者であることを忘れさせられてしまう感じがした。

・希望もなく暗い世の中に無理に決意するのではなく、どんなままであろうとニヤニヤ笑って生きていけという言葉からは、過去に挫折を経験した彼らだからこそ言える、今の時代に生きる人への励ましだと感じた。時につらく、時に大変な人生であるが、人生山あり谷あり。今ある大切な人の笑顔のために、なんとなくでもいいからニヤニヤと前向きに生きていきたい。

・70 歳のおじいちゃんたちの話なのに高校生に響く場面ばかりだった。今まで出会った本の中のおじいちゃんで最高のおじいちゃんだった。第零話の巣立の思いが元応援団に届いた思いと絶妙にいい方向に行き違っているという展開が面白くて幸せな気持ちになった。本自体厚くて高校生が皆手に取るとは言い難いが、もっと読んでもらいたくて、部活の友達に宣伝したら、貸すことが決定した。もっと高校生に読まれるべきだと思う。自分が応援したい人、今の人生に少しでも悩みのある人に元気と笑いを与えてくれる 70 歳のコメディ。いい本に出合った。

・かつての応援団の仲間からの遺書をきっかけに応援団を再結成することとなり、年齢などの難しい点も多い中、再結成を決め、遺書の謎を解いていく姿に元気や勇気をもらっ

た。遺書の謎について、読み進めながら、自分で考察していくのが楽しかった。

・高校で培った絆、友情、仲間というものは、年を経ても変わることはないと、私はこの本を読んで理解した。目指すものをやり続けるとき、挫折してしまいそうな時、この本は大きな支えとなってくれると思う。

・友情や家族との関係について学ぶことができました。１人の言葉で高校時代に戻り、もう一度応援団を再結成し、たくさんの人に協力してもらいながら、まるで高校生活をふつうにおくっている人のように、楽しんでいる姿がとてもすごいことで、私も彼らみたいに誰かを全力で応援し、自分で楽しめるように生きていきたいと思いました。

・意気込みだけで人を動かしてしまうのはすごい。ラブニヤニヤの精神は見習いたいなと思えた。つらいときでも終わった後には笑っていたい。

・亡くなってしまった巣立さんが最後の願いとして一緒にやっていた元応援団の引間、宮瀬板垣に応援団を再結成してほしいという遺書を残した。そして応援団をやることになった３人が苦しむ人々を応援していく、青春ならぬ「老春」にとても感動しました。おもしろい場面もあるので若い人でも楽しく気軽に読むことができる作品だと思いました。

・今まで死ぬことが楽しみだと思ったことはなかったけれど、この本を読んでから死ぬことに対するイメージが変わった。70 歳になったとき、自分もこの本の登場人物のように、何かにこの一生懸命になれる人になりたいと思った。

・何様だ！という感想になってしまうかもしれないが、仲間から遺書の謎を解くためにがんばっているおじいちゃんたちがすごいと思った。たった一言の文であれやこれやと奮闘している姿がめちゃくちゃかっこよかった。最後に、遺書の内容の謎が解けるため、それまでに自分の中で考察しながら読むのが楽しかった。

・自分とはまるで違う人間というのは案外見ていると面白いもので、違うからこそ数少ない共通点というものに親近感が湧き、深くのめり込むことができます。

○その他の候補作品（発売日順）

森　瑛『Ｎ／Ａ』（文藝春秋社、2022 年６月）

・この人がこう言っているから、つまりこういう人なんだな。ということは、配慮のつもりでも安易な決めつけによってさらに窮屈にさせてしまうということが理解できました。ＬＧＢＴＱ＋の知名度も上がっているが、逆に決めつけを増長してしまっているのかもしれない。

・汚い部分も、悲しい部分も、中途半端な部分も包み隠さず書いていて、この年の少女をしっかりと見つめて書かれたのだと実感した。この年齢特有の大げさな気まぐれが次第に彼女の本当の悩みになり、そしてさらに、気づきと成長へと変化していく。誰かに認められたい、分かってほしい、そんな誰もが共感できる感情を改めてそのままの姿で見られたような感じがした。

・ＬＧＢＴＱの人を差別しないようにしよう。障害者に偏見を持たないようにしよう。といった多様性の配慮が欠かせない世の中になっているが、そういった人たちは特別と思われたくなく、あくまでただ普通の他人でありたいのかもしれない。目で見える差別こそ減ってきてはいるが、そういった意識の隔たりが、彼らとの間に壁をつくって意識してしまうのかもしれない。

・まどかと私は似ている所もあったし、私には分からないところがまどかにあった。このことから、人は完全に理解し合うことはできないとも思った。「かけがえのない他人」において、まどかの求めることは私からは絶対に思いつかない考え方で、人とのかかわり方に深く感じるものがあった。コメダ珈琲で翼沙からＬＧＢＴへの扱いをされたときのまどかの心情の表現が適確で分かるようで、分からなくて苦しかった。自分は人に決めつけられるのが嫌いだが、自分が決めつけてしまっているところがあるのかなと考えさせられた。読みやすいけど、考える程分からなくなる本。

・描写がリアルで主人公のまどかの気持ちが分かりやすかった。まどかの視点だからまどかの抱える思いに共感できるところがあったが、他の登場人物との関わりから周りから見たら理解できてないことも多く、接し方が難しいことも感じた。この本を読んでマイノリティに対する考え方が変わった。

・この物語で起きる１つ１つの出来事が、抽象的でおもわず本の世界に溶け込んでしまうような本であった。「かけがえのない他人」という関係でありたい主人公が、相手に合わせうまくいくこともあれば、空回りしてしまうところに、強く共感という気持ちが芽生えた。

・今の自分たちのような高校生活の中で、人間関係が上手にいかないことが多いけどその中でかけがえのない他人を見つけ、何の問題なしに生きていくことは大変だと思った。
今、いろいろな問題を抱えている人に対する対応やそういう人たちとかかわっている人への言葉や行動、最近話題になっているジェンダーについてたくさん学べました。

・この本を読んで普段から何かなじめなくて、違和感を持ちながら生活することの感情を感じ取ることができた。思った以上に感情が鋭く切り込んでいる。

・ＬＧＢＴＱについて意見が多数ある。受け入れて普通に過ごす人もいれば批判する人もいる。今では減ってきている批判だが、まだ少数の人が残っている。この本を読むことでＬＧＢＴＱの現状を知ることができ、多くの人が受け入れることができたのではないかと思った。

・あまり簡単に言葉にできないようなものがこの本には言葉にされている。それによって現代を生きる人たちが当たっている壁が手に取るように分かった。

・現代的な描写が多く、読みやすかった。読み終わった後にタイトルである「N/A」について調べ、この言葉の持つ意味を知った時、主人公の抱えている悩みなど、物語の内容を表現しているようで、グッとくるものがあった。ラストで主人公がうみちゃんと再会する場面がとても温かかった。ただ、生理などの表現が直接的で、正直、最初は頭や目が文字を追い、物語を理解するのを止めていた。

・この本はどちらかと言えば、女子高校生が共感し深く考えることができる内容ではありますが、だからこそ、男子高校生にも読んでほしい。昨今の人たちの考え方というかスタンスというものが良くわかり、考え直さなくてはならないなと自分を見つめなおす機会にもなる。

宮島美奈『成瀬は天下を取りにいく』（新潮社、2023 年３月）

・この本に出てくる成瀬は行動力がすごく、周りからの評価など気にもとめず行動することにとても憧れを持ちました。しかし、後半を見ていくと、そんな成瀬にとっても友人はかけがえない存在であることがわかり、私たちと似た感覚もあるということで余計にこの「成瀬あかり」が魅力ある人物だということが感じられました。

・最初の２つは「遠くから見守る友人」と「最も近くで共に挑戦していく友人」と、島崎という少女がどちらもひきつけ成瀬と過ごしていた。また次は完全にテレビなどの視聴者から敬太。そして新しい学校では、成瀬が苦手な少女に、かるた部では他校の成瀬に好意を抱く男性に変化した。しかし、私が一番心に残ったのは最後だった。上記の流れで成瀬はひどく得体のしれない人間に見えた。だが、最後で成瀬も普通の少女の如く、迷い悩んでいることに気づいた。本当にたくさんのことに気づかされた作品だった。

・自分はいつも周りの空気を読みすぎてしまって、自分の意見を思うように言えなかったり、人の目を必要以上に恐れてしまったりするのだが、そういった心配もしたことがないような成瀬の姿に憧れを感じた。それこそ天下を取りに行くほどの勢いで突き進んでいく姿はかっこよかった。私も彼女を見習って自分の思うままに堂々としていられるような人になりたい。

・私はこの本を読み終えたとき「島崎になりたい」と思った。この本の中で圧倒的な主人公は成瀬だが、島崎もなかなかにすごかった。2 人でM－１に出た場面では、島崎もだんだんと本気になっている様子が言葉で良く伝わり微笑ましかった。学校や周囲から一目置かれている様子を間接的に伝え終えた後の成瀬目線のエピソードはアツかった。こんな仲良くなりたいキャラに出会ったことがなかったため読んで良かった。成瀬みたいに突っ走れる人になりたい。

・主人公の成瀬の性格がすごく好きだと感じた。自分を曲げずに、何事も全力で取り組む姿がかっこいい。自分も成瀬のように物事に全力で取り組んだり、やりたいことを実行する行動力がほしいと思った。滋賀県の地元ネタ満載で地元の人に読んでもらいたいと思った。

・この本ならではの地元の物語であり、大きな夢に向かって諦めずに取り組む成瀬のかっこよさが分かる本だった。私だったら諦めてしまいそうな１つ１つの大きな夢を何個も挑戦し、叶えてしまうすごさに圧倒される展開だった。

・今、夢に向かって勉強やそれ以外のことをがんばっているけどこの本の主人公のように夢に向かってがんばり続けるとどんな夢でも絶対できるということが分かったので、これからもがんばりつづけたいと思いました。

・自分のやろうと考えたことはすぐに実験したり、行動する。そしてしっかりと結果を残す。言葉にするだけでなく、実行し成功する。うまくいかなかったとしても有言実行するところが尊敬できる人物。読み終わってからも続きがでてきてもおかしくないと思った。

・私はこの本を読んでみて、やろうと思えばなんでもできる勇気を与えてくれる感じがしました。主人公の成瀬が普通、中学生や高校生では思わないような目標を立て、それに向けて努力をする姿勢や達成していくことが読んでいて勇気をもらったような気持ちになりました。

・何事にも全力な成瀬はかっこいいと思った。２００歳まで生きる、テストで５００点満点を取るなど実現することが難しいことの中にある可能性を見出して挑戦する姿が心に残った。大きな目標を立てて達成することができなかったとしても落ち込まなかったり、他人の目を気にしたりしない成瀬の魅力が伝わってきた。

・中学生から高校生まで物語が進むにつれて、成瀬たちも成長していく姿が書かれていて、「最後までこの子たちの成長を見守りたい・・・！」と思った。成瀬のＭ－１に出場しようとする意志や、毎日、西武大津店に行く行動力はもちろん、それを成瀬と一緒にやり遂げる島崎もかっこいいと思った。自分が「うらやましい」と心の底から感じるほど、成瀬と島崎は「青春」をしていると思った。

・同じ年代の学生たちの話であるので、共感する部分やこうなってみたいという願望や憧れにつながる。とてもさくさくと読めるし内容も詰まっているので読みごたえもある。

こまつあやこ『雨にシュクラン』（講談社、2023 年４月）

・大多数の人たちとは違う生活をしていることを、理解し認めてほしい気持ちと知られたくない気持ちのどちらもあって難しいなと思いました。自分がそれを分かってもらうにはまず他の人たちの少数派な部分をおかしいと思わず受け止めることが大切だと感じました。

・本当に言葉がキレイだと感じた。主人公の真面目で強がりな性格をだしながら、彼女の感性より、雨の滴のように表現を落としていく。また、この年の少女らしい夢見がちな部分までしっかりと再現されていた。しかし、私はこの多種多様な主人公の感情は、学校生活を彼女が見てはじめて気が付く美しさを、読者である私たちも見ているのであろう。

・日本も外国も文化が違えば暮らしも違う。そんなものに偏見や恐れを抱えるべきでなく、どんな文化にもそれ特有の美しさや深みが出るんだと教えてくれる作品。主人公は父の影響で高校をやめ、引っ越すという落ち着かない生活をしていたが、習字と言う文化交流によって異文化の楽しさを知ったので、文化を受ける姿勢は大切だと感じた。

・私も主人公と同じように習字を習っていたが、アラビア習字というものは初めて知った。初めのシーンでは、書道をやるために入った高校であこがれていた先輩に転校をすすめられるところはすごく心苦しかったし、中退を決意した主人公は本当にすごいと思った。私は吹奏楽部にあこがれて今の学校に入学したが、主人公と同じ行動はできなかったと思う。ユルマズ姉弟からの発言では周りに理解されにくいこと、宗教の事、色々考えさせられるところがあった。

・イスラム教やアラビア書道、トルコ料理など、自分が教科書でしか見ていないようなあまり知らなかった世界に触れ、その良さを知ることができた。真歩がせっかく入学した高校に通えなくなる場面には理不尽さを感じたけれど、アラビア書道や友達などの出会いがあったことで、高校に行くだけがすべてではなく、色々な選択があると思えた。

・描かれている普段の日常が、私とは違い、多様な文化と隣り合わせで、けれども起きている日常は私と同じリズムであり、とても、物語の展開が多くて読んでいて楽しかった。

・私は今第一志望の高校に合格し、自分の好きなことや、やりたいことをやりながら生活しているけれど、主人公のようにいつ今のあたりまえがあたりまえではなくなってしまうか分からないし、もしそうなってしまった時に高校に行くことじたいをやめるという判断ができないと思ったのですごいと思いました。これから自分の人生は自分で作り、他人にながされずに生きていきたいと思いました。

・高校を中退して道がなくなったと感じたけれど、１つのささいなことがきっかけで自分の道が切り開けるんだということにとても印象を受けた。１つの決めた道ではなくて、常に新しい道を探して新たな道を切り開けるようになりたいなと思った。

・ずっと目指していた高校に入学できた主人公が、父の転勤でやめてしまうことになってしまった。そんな中、図書館で出会ったイスラム文字のおかげで新しく自分がやりたいと思えるような生き方をしているところが魅力だと思った。型にはまったような人生ではなく、自分が生きたいと思える生き方を思わせてくれるような本。

・真歩の「決めつけないで。私はただそう言いたかったのかもしれない」という言葉がとても印象に残った。型にはめられた選択をしなければならないことがあるけれど、自分の考えを大切にする真歩を見て、自分の本音と向き合って行動することも大切だと感じた。普段あまり関わることのないイスラム教の考え方や、イスラムの文字を感じることができた。

・青春の形っていろいろあるんだなと感じる物語だった。マンガのような甘酸っぱさなどは無かったけれど、この物語に出てくる言葉１つ１つに青春が詰まっているような気がした。アラビア文字、書道が登場する物語というのも、初めて読んで、新鮮な気持ちになった。１ページの文字数も、本全体の量も多くないから読みやすかった。自分らしさを見つめるきっかけになってくれる一冊だと思う。

・学びというのは思いの外、予想していない所から学べたりもするので、この機会にぜひ手にとってみてはどうでしょうか。自分はどうしても外国の文化を否定的に見てしまう側面があるので、今回でそれが少し拭い去れて良かったと感じている。

濱野京子『金曜日のあしたたち』（静山社、2023 年６月）

・地球環境のことはニュースでよく聞くけれど、高校生に何ができるのかと言われても良く分かりませんでした。この本を読んで、タンディグという訴え方もあるのだと知りました。大げさなことはできないけれど、少しでも地球のためになることをしてみたいと思いました。

・この年齢の子が感じるであろう不満を的確にとらえていることが、余計に感情移入させられやすくしていた。また、水沢という人物の腹が立つけれど憎めないという人物像も、綺麗に制作されすぎていて、こちらまでひきこまれていくように思えた。彼に出会うことで主人公は環境という面においても、新しい高校生活という面でも大きく視点が変化し、私もまたその狭かった視点が広がっていくような感覚におちいってしまった。

・近年ニュースで問題になっている環境活動家の悪行とは違い、真剣に地道に地球の危機を発信しようとしている主人公たちの姿に、これが本来あるべき環境活動家なのだと感じた。自分は地球温暖化と聞いても自分一人じゃどうにもならないと何もしないが、彼らはそれを他人事にせずに若いながらも行動を起こしているので、そういう誠実さがすばらしいと感じた。

・読む前は環境問題が題材の本だと思わなかったし、こんな興味を持つとは思わなかった。いい意味で裏切られた感じ。環境問題に触れつつも高校生らしい人間関係の悩みについても書かれていておもしろかった。最終的に人間関係の方は円満な感じで終わっている。ところが「残るは環境問題」「今度の未来はあなた次第」と読み手側に本が訴えているような気がした。本に出てきた“アップサイクル”は私も元から興味があって、本をきっかけに自分で調べてバッグを買った。手軽に高校生でも読みやすい内容で友達にも勧めやすかった。

・環境問題について学ぶことができるし、友情や恋愛など青春を感じる物語で読んでいて楽しかった。物語の終わり、陽葵と涼真がどうなったのかがすごく気になる終わり方で、その後について色々な想像ができ、続編が出てほしいと思った。

・ある日に、ふと見た同じ経験をした。同年代から一筋の希望をもらい、自分から行動す

るようになった。主人公の強さに感動し、「自分」で動き、行動することが、とても大切であることを改めて感じる本であった。

・高校に入学してすぐの話で自分も入り込みやすく、今問題になっている環境問題について分かりやすく書いてあって、今まで聞いたことがない言葉が多く出てきたけど、自分たちが大人になっていくにつれて、環境問題や貧困、経験格差などがどんどん悪化していくということが分かったので、これから自分で考え、周りの人をまきこみながら行動していかなければいけないことに気づかされました。

・興味を持ったことに対してやり遂げる事、中途半端にやらないようにしたいなと思った。主人公の行動力がすごいと思った。自分だったら勇気が出ずに縮こまっていそうなところも行動に移せるところがすごい。

・この本は主に地球上でおきている気候変動のことについて書かれていて、その中に恋愛や人間関係のストーリーも組み込まれていて、読んでいて飽きることもなく、楽しく読むことができた。そして、私たちにとって気候変動は大事なことで、知っていなければならないことなので、この本を読むことで、自分が今どういう状況の中で生きているのかを小説で知ることができるのはいい事だと思いました。

・高校受験に失敗して荒れていたひまりが環境問題研究会に出会ったことで、少しずつ変わっていく姿が印象に残った。ひまりのように環境問題が深刻になっていることは知っていても、重く受け止めていない人が多いので、残されている時間は少ないこと、深刻になっている環境問題について良く考えるようにしてほしいと思った。

・青春×現代の問題×友情と内容盛りだくさんの本。環境問題についての勉強もできるし、友情、恋愛など、「青春」を感じる描写もたくさんあって、読んでいて楽しかった。物語に出てくる人物たち一人一人にキャラ性があってすごいなと思った。全部読み終わって「続編」が出てほしいなと思った。久々に一冊で物語が完結する本の「その後の物語」が気になる本に出会えた。

・痛みと共に甘さを感じられる作品で、それが過去と今の違いというものを再認識させてくれました。懐かしさという感情をこの年で感じることは少ないのですが、たった数年前の出来事でもそう感じるというのはそれほど印象に残り、たまには過去を見つめ直すのもよいのかもしれません。

高校生が選ぶ掛川文学賞とは？

高校生が選ぶ掛川文学賞は、掛川市内の４つの県立高等学校と市立図書館、市民文芸団体が協働して「文芸のまち掛川」を実現するため、高校生が主体となって市民全体で、高校生の読書活動推進と啓発を行う事業で、令和４年度からはじまりました。今年度は２回目の開催となります。

７月に掛川市民５名からなる市民選書会議を開催して、「高校生に読んで欲しい５作品」を選出します。この５作品は、各高等学校から立候補した高校生選考委員にプレゼントされ、高校生は夏休みから秋の読書週間にかけて、その本を読み感想や気づきをノートに記録していきます。

11 月に高校生選考委員が一堂に会して、選考会議を開催し、対話をつうじて、高校生の目線からもっとも共感を得た作品を選び「掛川文学賞」を決定します。

「文芸のまち掛川」の実現をめざして

2001 年 11 月、議員立法により「子どもの読書活動の推進に関する法律案」が提出され、同年 12 月に成立、交付・施行されました。

2002 年８月には「子どもの読書活動の推進に関する基本計画」が閣議決定され、2023 年３月には、おおむね５年（2023 年度から 2027 年度）にわたる子ども読書活動の推進に関する基本的な方針と具体的な方策を示す、第５次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が閣議決定されています。

静岡県でも、2004 年１月に「県民一人一人が生涯を通じて読書を楽しむ習慣を確立する「読書県しずおか」の構築」を基本方針に推進計画を策定、現在は 2022 年３月に、第３次静岡県子ども読書活動推進計画後期計画（「本とともだち」プラン）に引き継がれています。

掛川市でも、県内の他の市町にさきがけて、2005 年９月に第１次掛川市子ども読書推進計画（掛川ほんわかプラン）を策定、2021 年４月には「第４次掛川ほんわかプラン」にブラッシュアップされています。

この事業は、こうした国・県・市の子どもの読書活動推進計画の動向を踏まえ、ヤングアダルトと呼ばれる中高生・若者の読書活動推進の方策の１つとして実現したものです。

乳幼児からシニア世代まで、それぞれのライフステージごとに読書や創作活動を通じて、「個人と市民全体の Well-being の向上」が図られるまち、「文芸のまち掛川」の実現の一助として、この事業が位置づけられることを願っています。

（文責　杉山直康）

令和５年度高校生が選ぶ掛川文学賞高校生選考委員名簿

（高校生選考委員）

NO.	氏　名	所　属	学年	備考
1	田宮　和華	静岡県立掛川東高等学校	２年	継続
2	杉田　若菜	〃	２年	継続
3	本庄谷歩夏	〃	１年	
4	鴻野ななこ	静岡県立掛川西高等学校	２年	
5	根耒　真琴	〃	１年	
6	遠藤　来映	〃	１年	
7	林　　直生	静岡県立掛川工業高等学校	２年	継続
8	鈴木　瑞葉	〃	１年	
9	寺田　愛奈	〃	１年	
10	中井瑠奈美	〃	１年	
11	安間　悠姫	静岡県立横須賀高等学校	２年	
12	藤田乃々花	〃	２年	

令和５年度高校生が選ぶ掛川文学賞市民選書委員名簿

（市民選書委員）

NO.	氏　名	所属・役職	属性
1	石川　紀子	掛川市副市長	行政
2	小川　雅子	大日本報徳社主事（児童文学者）	市民代表
3	河合　和香	静岡県立掛川東高等学校教諭	高校教諭
4	浅井　淑子	掛川市立中央図書館主査	司書
5	高木　久直	高久書店店主	書店代表

令和５年７月６日

実行委員会委員長

市民選書会議における選書についての申し合わせ事項

高校生に読ませたい本について、下記のとおり基準を設定いたします。

記

（選書会議に持ち寄っていただく作品について）
〇今の高校生に読んでもらいたいと思う作品を推薦ください。
〇１委員が推薦する作品は、２作品から最大５作品とします。
〇小説などの文学作品とします。（自己啓発本・ビジネス本などは対象外です）
〇文豪（故人）やベストセラー作家など評価が高い作家の作品は除き、できましたら新人作家の発掘を視野にいれてください。
〇ライトノベル、児童文学、ファンタジーも可とします。
〇長編だけでなく、短編を集めた短編集でも構いません。
〇単行本・文庫本どちらでも構いません。
〇過去３年（令和２年７月）以降に発表された作品に限定します。

（選書会議において御留意していただきたいこと）
〇１作品１分程度のお時間で選書理由を発表していただきます。
〇選書委員すべての合意をもとに５作品を選んでいただきます。
〇会議の進行は実行委員会委員代表が務めます。あらかじめ御了承ください。

（その他）
〇今回選書いただいた５作品については、市内県立高等学校、市立図書館にて、「高校生が選ぶ掛川文学賞候補作品」として展示いたします。
〇不明な点は、事前に事務局に御相談ください。

事務局　県立掛川工業高等学校
杉山（0537-22-7255）
kakegawa-th@edu.pref.shizuoka.jp

高校生が選び掛川文学賞実行委員会委員・事務局名簿

（実行委員）

NO.	氏　名	所　属	役職	備考
1	鈴木　　学	静岡県立掛川工業高等学校	校長	委員長
2	後藤　晶子	掛川市立図書館	館長	副委員長
3	鴻野　元希	ほんわかブッククラブ	代表	
4	松井　君貴	静岡県立掛川東高等学校	図書情報課長	
5	浜浦麻里子	静岡県立掛川西高等学校	図書課長	
6	杉山　直康	静岡県立掛川工業高等学校	図書課長	
7	中根　昌世	静岡県立横須賀高等学校	図書課長	
8	榛葉　公浩	掛川市立図書館	主任	

（事務局）

NO.	氏　名	所　属	役職	備考
1	杉山　直康	静岡県立掛川工業高等学校	図書課長	（再掲）
2	鈴木　智彦	〃	図書課職員	
3	岩崎　公子	〃	事務長	

※この事業は令和５年度掛川市市民チャレンジ公募事業（若者の市民活動の推進につながる事業）に企画提案し採択されたものです。

高校生が選ぶ掛川文学賞実行委員会

静岡県立掛川東高等学校
静岡県立掛川西高等学校
静岡県立掛川工業高等学校
静岡県立横須賀高等学校
掛 川 市 立 図 書 館
ほんわかブッククラブ

令和６年１月２０日発行